世界遺産の村ホッロークー（ハンガリー）から村長と校長をお迎えして

海外交流

鈴　木　広　和*

We invited the village mayor and the head of the elementary school from the World Heritage Site of village Hollókő

Key Words：Hollókő, the World Heritage, Hungary, community development

はじめに

昨年11月22日にハンガリーから3名の方をお迎えして、豊中キャンパスにて外国語学部ハンガリー語専攻1年生のクラスで講演していただいた。ホッロークー村の村長サボー・チャバさん、村で唯一の小学校で校長先生を務めているナジ・カタリンさん、お二人に同行して通訳をしてくださったブダペスト商科大学のセーカーチ・アンナ先生の3人である（写真1）。（ハンガリー人の名前は姓・名の順なので、その順で表記する。）セーカーチ先生は日本語が堪能なのはもちろん、数十年来、ホッロークー村とのつながりがあり、村の変化についてもよくご存じで、今回の講演の通訳には最適任の方である。

ホッロークー村は1987年に、村としては世界で初めて世界遺産に登録された。首都ブダペストから北東90キロメートルほどのところに位置する山間の村である。この村にもともと住んでいたのは、ハンガリー人の中のパローツと呼ばれる人々で、独自の文化を今でも保っている。しかし人口減少、特に若者の流出に悩まされ、世界遺産に登録された後も、過疎化は止まらなかった。ブダペストからの交通の便が必ずしもいいとはいえないため、村を訪れる観光客もそれほど多くなく、訪れても村を一巡りして帰ってしまうという状況であった。そのような状況を変えたのがサボー村長らの尽力である。村おこしのさまざまな施策によって、村は徐々ににぎやかになり、経済的にも好転しはじめ、しだいに多くの若者が住むようになってきた。今回、サボー村長からは、村が世界遺産に登録された理由や村の概要のほか、ご自身の経験に基づいて、村の発展と現況について話していただいた。ナジ校長には、村の伝統を子どもたちに伝えていくために、小学校でおこなっている取り組みについて紹介していただいた。

写真1　右からセーカーチ先生、ナジ校長、サボー村長

サボー村長の講演

村の人口は約360人で、その内約200人が労働力人口であり、働く女性が多い。村の主な職場は役所と、村のNPOである。NPOはレストラン、カフェ、宿泊施設、博物館、幼稚園、観光客向けインフォメーションなどを運営している。

村が世界遺産に登録されるにあたって重視されたのが、以下の4点である。(1) 村の中心にパローツの人々が作った独特の家並みと木造教会（写真2）、(2) 村の背後の山にある中世の城（写真4）、(3) パローツの伝統が維持されていること（写真3, 5）、そして (4) 周囲の美しい景観である。

観光資源を活用して村を活性化させるため、EUの財政援助（ÉMOP-2.1.1）を受けて、2015年まで

* Hirokazu SUZUKI
1959年4月生まれ
東京大学大学院　人文科学研究科　西洋史学専攻博士課程（1995年）
現在、大阪大学大学院　言語文化研究科　言語社会専攻　教授　文学修士
中世ハンガリー史
TEL：072-730-5318
FAX：072-730-5318
E-mail：suzuhiro@lang.osaka-u.ac.jp

写真2　ホッロークー村の中心にある教会と家並み（講演資料より）

にさまざまな村おこしの施策をとった。たとえば観光客向けのインフォメーションセンターのほか、野外劇場、民族衣装博物館、昔の小学校博物館を建設・開設し、村中心の通りを整備し、レストラン、パン屋、チーズ屋などの商店を開設した。城内の施設も充実させた。これらの施設整備に負けず劣らず重要であったのが、季節による観光客数の偏りを抑えるために、季節ごと、月ごとに何らかのイベントを開催するようにしたことである。たとえば、冬の終わりには謝肉祭、春には復活祭、5月にはホッロークー・ピクニック、夏には城を利用したさまざまなイベント、9月には城マラソン、12月には世界遺産の日、といった具合である。とりわけ復活祭の祝日には、非常に大勢の観光客が訪れ、ハンガリーでもっともにぎやかな村となる。こうした断続的に行われるイベントによって、観光客はかつてとは異なり、季節に関係なく、いつ村を訪れても、楽しく有意義に過ごすことができるようになった（講演後にサボー村長に質問したところ、復活祭の際には、村が観光客であふれ返り駐車場が不足するという悩みがあるが、観光公害の問題は特にないとのことであった）。他方で、村人のために毎年8回、子どもの日や年金生活者のための日などのイベントが開催される。

写真3　パローツの伝統衣装（講演資料より）

ナジ校長の講演

ホッロークーの小学校では、ここ数年、1～4年生合わせて20～30名が学んでいる（ハンガリーの小学校は8年制。5年生からは近くの町の小学校に通う）。20年ほど前には、生徒がわずか7名しかおらず、学校の存廃が問題となっていたほどであるが、村活性化のおかげで生徒数は増えている。近年は他の村からも、生徒がホッロークーの小学校に通うようになっている。学校の教室は2室だけだが、近年いろいろな施設や備品などが充実してきているほか、美しい芝生の校庭が自慢である。

写真4　ホッロークー城（講演資料より）

生徒たちは授業のなかで、村についてさまざまなことを学んでいる。たとえば国語では村の民話を学び、音楽の授業では村の民謡や伝統的な子ども遊びに親しむ。図画の時間には城や村中心部の絵を描き、技術科の授業では独自の様式を持つパローツ家屋について学ぶ。村の伝統的な習慣や行事、民俗衣装のほか城についても勉強する。パローツの伝統的生活文化について、村のお年寄りたちから直接教えてもらいながら、たとえば刺繍、復活祭の卵の彩色、陶芸、伝統的なお菓子づくりなどを体験する（お年寄りたちにとってもやりがいのあることだと推測される）。学年が上がるにつれて、しだいに高度なことを学べるようにプログラムを組んでいる。亜麻の糸づくりや、機織りなども体験する。刺繍もより複雑なものを習得する。そのほか、民俗舞踊も習う。学校の公式行事の際には、生徒たちは民俗衣装を着てくる。こうした教育プログラムの目的は、何よりも子どもたちに喜びを与えることにある。その喜びを通して、子どもたちが村に愛着を覚え、そしてそのことが、子どもたちが村に住み続ける、あるいはいったん外に出てもいずれ村に戻ってくることにつながると期待している。

写真5　パローツの伝統衣装（講演資料より）

おわりに

以上がサボー村長とナジ校長の講演の概要であるが、当日はお二人の講演の間に、セーカーチ先生を含め3名の方を日本に招聘した東京中小企業家同友会港支部の伊能隆男さんから、ホッローク一村と関わりを持つようになった経緯についてお話しいただいた。2005年に同会のメンバーがハンガリーを訪問した際に訪れたホッローク一村で、上述のように小学校が廃校の危機にあることを知り、小学校存続支援基金を設立したことなどについて話していただいた。現在、小学校の生徒数が増えているのは、伊能さんたちの支援の賜物であり、本当にすばらしい活動をされてきたことに対し、深い敬意の念を覚えた。なお、今回の招聘では、3名の方は伊能さんとともに、ホッローク一村と同様、世界遺産の村である白川郷を訪問し、そちらでも交流されたとのことである。

ハンガリー語専攻の1年生が対象の講演会であったが、上級生も何名か参加して、皆熱心に話を聞いていた。講演のあと、学生たちからの質問に答えていただいた（写真1）。いつなら小学校を訪問できるかという質問に、ナジ校長は、日本からハンガリー語ができる学生が来てくれたら、生徒たちはきっと皆大喜びするので、いつでも遠慮なく学校に来てほしいと答えてくださった。またサボー村長が、是非村に来てほしい、村に来たら、いつでも役場を訪れてほしい、皆さんには村の宿泊所を無料で提供する、と話すと、学生たちの間から歓声が上がった。こうして講演会は無事終了したが、終了後も教室のあちこちに話の輪ができて、学生たちは熱心に耳を傾けていた。学生たちにとって、ハンガリーへの関心を深める、またとない機会となった。サボー村長、ナジ校長、セーカーチ先生、伊能さんに、この場を借りてあらためてお礼申し上げるしだいです。